

異文化交流実践を授業へフィードバック

松浦 まち子 ・ 浮葉 正親 ・ 田中 京子

I. 基礎セミナー A (前期)「多文化社会を生きる」(代表：松浦まち子)

1. 授業のねらい

外国文化を持って日本で暮らす人々に焦点をあて、彼らの視点を通じた日本を知ることによって、日本社会の課題に気づき、様々な文化を持つ人々が共に生きることについて考える。

2. 受講者及び講師

開講4年目の授業で、受講生は12名(内訳：文1名、法3名、経済1名、情文3名、工2名、農2名)、TAは医学系研究科博士課程1年の賈燕君さん(中国人留学生)にお願いした。ゲストスピーカーとして服部美奈氏(教育発達科学研究科教員、5/18)、イスラム文化研究会(5/18)、中村パトリシア氏(日系ペルー人留学生、5/25)、浅川晃広氏(国際開発研究科教員、6/8)、稲垣達也・アイダご夫妻(6/15)に参加してもらった。平成18(2006)年度は、浮葉正親、堀江未来、高木ひとみ、松浦まち子(代表)の4名が担当した。

3. 授業内容

3-1 スケジュール

- 4/13 オリエンテーション, 自己紹介, プレゼンテーション実演
- 4/20 体験した異文化を発表, 自分と異なる文化を持つ隣人について調べる
- 4/27 中国へようこそ(TAの出身国中国の文化を学ぶ)
- 5/11 異文化疑似体験
- 5/18 ゲストスピーカー「イスラムの人々と文化」
- 5/25 ゲストスピーカー「在日ペルーの人々と文化」
- 6/8 ゲストスピーカー「在日外国人の帰化をめぐる諸問題」
- 6/15 ゲストスピーカー「国際結婚した人々と文化」
- 6/22 発表のためのグループ分け, 発表準備

6/29 レポートを書く時の留意点と文献検索方法, 発表準備

7/6 発表準備

7/8 (補講) 発表と討論

7/13 発表と討論

7/20 発表と討論, まとめ, 授業アンケート

3-2 口頭発表テーマ

- ・中国の茶と日本の茶のつながり—茶から見る日本人の気質—
- ・宗教的音楽と文化理解—ゴスペル—
- ・宗教と人々—世界三大宗教の比較, アンケート, 日本人と宗教
- ・国際結婚
- ・踊りとアイデンティティとコミュニケーション
- ・スポーツと国籍
- ・私たちの万博
- ・世界のスポーツと生活の関わり

3-3 レポート集

毎年「レポート集」を作成して学生に配布する際には、学生個人のレポートへの各教員からのコメントを添付している。始まったばかりの大学生活であればこそ、これから大学で学ぶ姿勢のヒントともいえるべきものが温かくも厳しいコメントに含まれている。受講生が少数であるからできるきめ細かい指導である。

4. 評価

今回は、教材費を利用して新しいパワーポイントアプリケーションを購入させていただいたお陰で、TAは学生に対して適切な指導ができた。学生の授業評価アンケートではすべての項目で平均値を上回っており、とりあえず授業の成果があったと評価する。一方、少人数のゼミでありながら学生の発言回数が少なく感じた。意見を述べたり質問の時間は毎回十分取ってあるが、特に日本人学生は、ぱっと聞かれてぱっと自分の意見を述べるのが苦手のように思える。文章を書かせたり、時間を与えるととてもよい意見を持っているので、今後はどのようにして学生に発言させる

かを考えていきたい。また、木曜日の5時限は、名大祭の準備で必ず休講になり、その補講を7月の土曜日に行っているが、部活で試合が予定されていたりして出席できない学生がいるため、補講時間についても考えていきたい。

【参考】学生からのコメント（アンケート自由記載欄より抜粋）

- ★ 多くの人の話を聞けて、非常に貴重な機会だったと思いました。もっと海外のことを知りたいと思いました。
- ★ 毎時間とても授業が楽しみでした。ゲストスピーカーの話はどれも普段は聞けないものだし貴重な話が聞けてよかったです。
- ★ 授業内容が興味深くとても楽しかった。レポート頑張ります。この基ゼミを選んでとってもよかったです。
- ★ この基礎セミナーにして本当に良かった。毎週貴重な話が聞けて貴重な体験ができてとても楽しかった。
- ★ この基ゼミは本当に最高です。毎週この木曜5限を楽しみに頑張っておっています。先生もゼミのみんなも話しやすくて雰囲気もよくなって仲良くなれてもう最高です。
- ★ よい仲間に出会えたことが一番の収穫でした。たくさん刺激をもらうことができました。

II. 教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」（代表：浮葉正親）

1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

2. 受講者及び講師

学部生は31名（日本人学生26、学部留学生5）。受講生の学部別内訳は、文学部6、教育学部5、法学部3、経済学部2、情報文化学部2、医学部2、工学部7、農学部3、医学部保健学科1である。学部留学生の国籍は中国3、韓国1、マレーシア1である。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生17名（中国3、

韓国3、インド2、インドネシア2、ベトナム2、ウクライナ2、イタリア1、ブルガリア1）、日韓共同理工系留学生5名を加え、日本人学生26／留学生27、計53名で授業を行った。

平成18（2006）年度は、浮葉正親（代表）、田中京子、松浦まち子、堀江未来、高木ひとみの5名がこの科目を担当した。全15回の授業内容と担当は以下のとおりである。

3. 授業内容

3-1 スケジュール及び担当者

- 10/2 オリエンテーション（1）（全員）
- 10/16 オリエンテーション（2）（全員）
- 10/23 在日留学生と日本社会（松浦）
- 10/30 異文化との出逢い（田中）
- 11/6 異文化コミュニケーション（堀江）
- 11/13 グループ活動について（浮葉、高木）
- 11/20 グループ発表準備（全員）
- 11/27 グループ発表準備（全員）
- 12/4 グループ発表と討論（全員）
- 12/11 グループ発表と討論（全員）
- 12/18 グループ発表と討論（全員）
- 12/25 グループ発表と討論（全員）
- 1/15 グループ活動から学ぶ（高木）
- 1/22 留学体験について考える（堀江）
- 1/30 まとめ（全員）

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1：マンガ・アニメ
- グループ2：大学生のアルバイト事情
- グループ3：人との距離
- グループ4：the Great “GAL”s ギャルこそ日本の宝？！
- グループ5：Valentine’s day
- グループ6：各国の正月と日本の正月について
- グループ7：結婚
- グループ8：ランドセルから見た日本文化

4. 評価

昨年に引き続き、グループ活動に対する評価を重視し、全体の40%（発表30%＋自己評価10%）とした。その他は、レポート30%、出席15%、クラス討論への参加度15%（10%は自己評価とした）である。グルー

発表に対する評価は、五つの評価項目を作り、5名の教員による評価を15%、他の学生による評価を15%とした。結果的には、どのグループも積極的に発表に取り組み、21~27%を獲得した。発表のなかにはインタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く、全体に工夫が感じられた。レポートについては、レポートの採点基準や方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は、最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

★ 実際に留学生と接していく中で、留学生を留学生として過度に意識する必要はないのではないかと気がしてきた。学部の違いも国籍の違いも、単なる違いという点では同じではないか。違いというよりは個性として受けとめるべきなのかもしれない。大切なのはその個性を受けとめ、関わりの中で互いに尊重し合うことだと思った。

★ この授業の前と後で、留学生の子と話をするときの緊張感がいい意味で少なくなったように感じています。毎回考えるべきことが多く、そうしたことが自分の体の中にどんどん吸収されていく感じがしました。

★ この授業を通して、異文化に対して具体的に考えるようになりました。今まではあまり興味もなかったし、興味を持っているとしても日本に関してだけでしたが、今回日本だけでなく、もっといろいろな国の文化について少しだけ分かることができよかったです。そして、今まで真剣に考えていなかった自分の国の文化についても今さら気づいたり、また違う角度から見ることができおもしろかったです。(留学生)

この授業が開講されてから10年経った。マンネリにならないよう、絶えず新たな気持ちで臨みたい。なお、この授業の内容は、本学ホームページの「名大の授業」に公開されている (<http://ocw.nagoya-u.jp/>)。

Ⅲ. 大学院授業「異文化コミュニケーション論」: 国際言語文化研究科 多元文化専攻メディア プロフェッショナルコース (担当: 田中京子)

2003年度に国際言語文化研究科日本語文化専攻にて開講した科目「異文化接触とコミュニケーション」を3年間継続したが、今年度は「異文化コミュニケー

ション論」として同研究科の国際多元文化専攻メディアプロフェッショナルコースの授業として行なった。将来メディアで仕事をする大学院生たちも視野に入れながら、少人数セミナー形式の授業を進めた。

1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として英語および日本語を使用して話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的に公平なコミュニケーションについて考察する。

2. 参加者

国際言語文化研究科日本語文化専攻・多元文化専攻の大学院生8名、前期に聴講生1名、後期は学習支援者1名(名大修了生 Celal Bayari さん)が加わり、必要に応じて学内外の学習支援者の協力を得た。TAと合わせて普段は10名ぐらい、また学習支援者がいる時には12~3名で授業を進めた。

普段は、年齢40歳代から20歳代までの年齢の男女、アジア、アフリカ、オセアニア、ヨーロッパ、南アメリカの6カ国の国籍の、11言語を使う、英語と日本語の運用能力も様々な学生たちが参加し、他の協力者がいる時にはさらに多様なメンバーとなった。

メディアを専攻する学生は3名で、他の学生たちは言語や文化の専攻であった。

3. TA

国際経験・社会経験豊かなTAが毎回授業に参加して活発に討論し、学生が英語で書くレポート執筆の補助を行なった。

生命農学研究科D2

ハビエル・ゴードン・オゲンボさん(ケニア出身)

4. 授業内容

- (1) 経験学習(疑似体験学習, ロールプレイ等)
- (2) 事例考察
- (3) 討論
- (4) 文献購読(宿題)

(5)文献についてのレポート（宿題）

(6)発表

年齢、国籍や生まれ育った環境、言語運用能力の異なる参加者全体の間にも生まれるコミュニケーションの中では、時には共通理解をはかるのが難しく、誤解や衝突がみられることもあった。不快な経験を検証することによって、積極的なコミュニケーションについて考えられるように、必要によっては教員が学生たちと個別に話す機会を設けながら進めた。しかし全体が信頼関係を構築するような雰囲気には到達できなかった。

前期は異文化コミュニケーションの基本的知識を、経験学習や事例検討を通して学び、ジェンダーのテーマの時には名古屋大学セクシュアル・ハラスメント相談所のスタッフが支援者として参加した。宗教とコミュニケーションのテーマでは、名古屋大学イスラーム研究会メンバーが発表を行い、討論に参加した。

後期は一人1時間使って専門に関わるテーマを異文化コミュニケーションの見地から発表した。発表要旨を前もって参加者に渡し、全員が準備をして発表を聞けるようにした。内容は専門や文化背景を活かした興味深いもので、討論が活発に行なわれた。それぞれの発表はコース終了後に論文や研究ノートとしてまとめ、TAと教員でそれにコメントしながらよりよい形にすることをめざした。

5. 課題

教員はこれまで行ってきた国際交流関連業務や留学生相談の中で培った異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育（相談）だけでなく授業の中でも生かすべく積極的に取り組んだ。逆に、この授

業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育、教育と研究の接点として、このセミナー式授業を大切に考えている。

今年度の参加者の中には就職活動に忙しい人が数名いて、出席や宿題の面で課題が残った。修士課程修了後に就職をめざす学生も多いというコースの特徴を配慮しながら授業を進める必要がある。

コース後の学生による評価では、多文化環境の中で異文化についての学びが多かったという意見のほか、参加者間の衝突があったときもっと話し合って解決したかった、さらに多くの文化圏から学生が参加するとよい、論文に対する教員やTAの援助がありがたかった、学習支援者たちの参加によってより深く学習することができた、などの意見があった。

教員にとっては、今年度の授業は意見の衝突や誤解が多くあったように感じられ、それをどう超えるのか、これまでに増して挑戦度の高いものであり、自分自身学ぶことが多かった1年であった。

6. 成果発表

国際言語文化研究科のプロジェクト予算の一部を使い、授業参加者の論文や研究・調査ノートを編集して *Midland Intercultural Review* という冊子を作成した。多分野の大学院生がそれぞれの研究を異文化コミュニケーションとの関連でまとめたもので、後期の学習支援者が編集者としても貢献した。研究・調査を文章にして見える形で発表するという作業の中で、大学院生たちが多くを学び、今後の活躍の励みになることを願っている。学内外の様々な人々の協力で成り立っているこの授業が、このように見える形として繋がりが広がっていくことを期待し、そのための努力をしていきたい。